

## どんでん返しの小説

読んでいた小説が、予想もしていなかった終わり方をしたときの驚きと爽快さは、読書の楽しみの一つですね。そこで今回は結末を予想させないどんでん返しの小説を3冊ご紹介します。

1冊目は、似鳥鶏/著『叙述トリック短編集』です。

叙述トリックとは、読者の先入観などを利用して、わざと読み間違いをさせるトリックのこと。読者が勘違いしやすい文章をわざと書いていることから、ともすれば意地悪、アンフェアと言われてしまうこともあるトリックですが、この作品ではそれを逆手に取り、タイトルに堂々と叙述トリックがあると宣言しています。つまりこの本はミステリーの短編集であり、叙述トリックがあると先に伝えても、読者を必ずだましてみせるという作者からの挑戦状でもあります。あなたはすべてのトリックを見破れますか？

一話一話は短いお話なのでスキマ時間にも楽しめる一冊です。

2冊目は、東野圭吾/著『容疑者Xの献身』です。

物語は、娘と暮らす花岡靖子のもとに、金銭目的で付きまとっていた元夫・富樫が押し入るところから始まります。3人はもみ合いになり、靖子たちは富樫を殺害してしまいます。呆然とする親子に協力を申し出たのは、物音を聞きつけてやってきた隣人の石神。やがて、警察の捜査が始まりますが、親子には覆せないアリバイがあり、捜査は難航します。果たして天才数学者である石神の用意した隠ぺい工作とは…。物語のラストに真実が明かされたとき、タイトルの意味が胸に迫ります。

切ない人間ドラマに引き込まれる一冊です。

3冊目は、綾辻行人/著『十角館の殺人』です。

推理小説研究会に所属する7人の大学生たちが訪れたのは、十角形のデザインをした奇妙な館のある無人島。この島では半年前に凄惨な殺人事件が起きており、学生たちは好奇心を隠そうともせず、これから始まる一週間の合宿生活に無邪気にはしゃいでいました。そこに連続殺人の罠がひそんでいることも知らずに…。

35年以上前の作品ですが、軽やかで読みやすい文章に、個性豊かな登場人物も相まって、ミステリーを読み慣れていない人にもおすすめの作品となっています。

時代を経ても色あせない驚きのトリックに目を奪われる一冊です。

図書館にはこの他にも、意外な結末を迎える小説がたくさんあります。ぜひ図書館にお越しください。